「青年思海」

本多浩

「青年思海」は明治二十年八月、青年協会を発行所とし創刊され、二十二年二月まで十九冊が発行された。はじめ「新人民」と題した見本を発行したが、学術雑誌の題名としては不適当であると内務省より許可が与えられなかったので「青年思海」と改題して一号を発行した。

社会ノ現象森羅錯落其ノ端緒ヲ尋ヌル能ハサルカ如シト雖モ要ハ則チ二大元素ニ帰セサル可ラス曰ク大人的ト青年的ト是也大人的ノ現象ハ秩序整然已ニ其全盛ヲ極メタリト雖モ文明ノ上進に随テ需要ヲ減シ価値ヲ失フ絶望的ノ現象ナリ青年的ノ現象ハ規法未タ立ス制度未タ定ス尤モ粗恢ノ観ヲ做スト雖モ文明ノ上進ト共に勢力ヲ加ヘ気燄ヲ揚ル希望的ノ現象ナリ吾人ハ実ニ此時代ニ生出シタル新人民也……

これが「新人民」と題した所以であった。「青年協(ママ)会の沿革及将来の運動」(十八号、22・1・15)によれば、明治二十年初春、池本吉次、人見一太郎、奈須義質、緒方直清、八木廉他五六名の協議によって雑誌発行を企画、六月二十日にその発起会を赤坂区霊南坂町第一基督教会で催した。その日に集った者は、山川瑞三、池本吉治、木下林蔵、大迫真之、垣田純朗、下村総策、宮田康三、中尾鹿次郎、毛利次宗、浜中吉次郎、岩井恒基、上村敬次郎、深見未、百島万喜、水谷真熊、人見一太郎、河上信之、松沢敬譲、松村豊記、田川秋平、柄本伊平、小田又三、川上良八、頴娃孝之助、頴原保人、白石万次、渡辺政徳、宍戸弗、阿部充家、宮崎弥蔵、奈須義質、宮坂徳二郎、谷口林太郎、松枝弥一郎、野村朴であった。

国木田独歩は八号(21・3)に「群書ニ渉レ」を寄稿した。これは独歩の最も早い作であった。また『中江兆民全集17』(86・2岩波書店刊)の「奉贈情雑誌記者先生並引」は十九号(22・2)に発表されたものである。

「青年思海」はあまりその実体が知られていないので架蔵の十号から十九号の目録を示しその一端を紹介しておく。

第十号　明治廿一年五月十五日

論説

◦退歩せる理想境　竹越与三郎
◦人間の自由説（性）　池本吉治
◦文章世界の優勝劣敗　燐濤遊士
◦文明ノ発達ヲ論ず　奈須義質
雑報
◦文思ヲ涵養ス可シ　球江小史
◦拿破翁ノ伝ヲ読ム　安達峰一郎
◦伝（詩）三首　夢蘇権吟客
◦孤窓の歎　河本哲鋒生
寄書
◦日本人記者に呈す　皷洋漁夫
◦政治と商業　川上良八
◦同志社英学校ト第一高等中学校　M. N.
◦恐ルベキハ忘心（妄信）ナリ　岡山文逸
◦青年諸君ニ一言ス　原田一雄
本会記事
発行人兼印刷人　池本吉治　編輯人　緒方直清

第十一号　明治廿一年六月十五日
論説
◦代議士ノ投票法ハ匿名及公開熟レカ利益ナル乎　梶原保人
◦日本文明ノ独立（第二）西洋文明と支那文明　上野岩太郎
◦南海先生　緒方直清
雑録
◦和漢の舊文章（其壱）　球江小史
◦国粋保存品々書　大和綾麿
寄書
◦国家的勢力の養生　渡瀬巍五郎
◦水滸伝ノ脚色　五貪軒逸人
◦経済的ノ運動　G. Y.
本会記事

第十二号　明治廿一年七月二十日
論説
◦青年子弟将来の責任　久松義典
◦日本文明の独立（第三）天然の理法を如何せん　上野岩太郎
◦職業的人民の勢力を論す　蛰龍生
◦徳育の方策　戸田銀太郎
雑録
◦日清文明論巻ノ二、三の漫評　燐濤生
◦和漢ノ舊文章（其二）第一文体概評　球江小史
◦詩三首　緒猶堂
翻訳
◦土地私有の不正なるを米国ヘンリー、ジョーヂ論す　三天堂主人

寄書
◦社会の変遷に処する実に難し　管原悌之輔
◦主義及基礎　高橋聳雲
◦青年思海の漫評　R. T. K. M.
本会記事

第十三号　明治廿一年八月十五日
論説
◦日本文明の独立（第四）一個人の気風を養成せよ（署名なし）
◦支那人放逐案を論ず　皴洋外史
◦撰挙区の権利を論ず　宇野直二郎
雑録
◦ロスヒル氏の自由主義外二件（署名なし）
◦新文学及新文学者　成簀堂主人
◦青年思海第十二号に就て　眼光子
◦緒方直清君を悼むの文　龍山外史
◦狷堂子墓誌銘　緒方直清遺稿
◦詩数首
翻訳
◦土地私有の不正なるを論ず　米国ヘンリー、ジョージ　三天堂主人訳
寄書
◦裏面的の事業（其一）　宮坂徳次郎
◦五貧軒逸人に答へ併せて小説を概評す　M. O.
◦主義及基礎　高橋聳雲
◦著作の思想を論す　井口潮

第十四号　明治廿一年九月十五日
論説
◦日本文明の独立（完）第五独立文明の時機（署名なし）
◦少数者をして代表者を得せしめ併せて善良なる代議士を得るの方法を論ず　梶原龍淵
◦偉男子　水谷真熊
雑録
◦コルトン氏ノ学問論外二題　（署名なし）
◦天民　R　S生
◦ギボン氏羅馬覆滅史著述後の感懐　鶴峯山人
◦詩稿自序　緒方直清遺稿
◦詩数首
◦幽霊　独逸詩伯ゲルレルト氏作　池辺蓮下樓主人意訳
翻訳
◦自治制度及ヒ印度ノ邑社　麹街逸史訳
◦自由党及ヒ保守党を論ず　オータースマイス著　龍山外史訳
寄書
◦吾人の心得三ヶ条　天晴外史
◦質疑　DS生

◦小説に就てのかすり筆　紫洋外史
◦青年協会員（ママ）へ寄する書　丹蔵斗美郎
◦日本帝国の暁天　釗堂小史

第十五号　明治廿一年十月十五日

論説
◦小説を論ず（第一）小説家（第二）新日本ノ小説家　大迫真之
◦少数者をして代表者を得せしめ併せて善良なる代議士を得るの方法を論ず（続）檜前保人（本文では梶原龍淵）

雑録
◦不朽不滅ノ栄譽。立法者ハ数人ヲ要ス。議論ト感情。基督教新聞の日本国民論。東京ノ新聞社将ニ「日本人」ヲ見舞ハントス。討論題ノ変更ヲ望ム。狷堂遺稿。秋の花を見て感あり

寄書
◦田舎ト都会　河上信之
◦ＭＯ君及紫洋外史氏ノ非難ニ答フ　五貪軒逸人
◦偶感一則　飯塚栄太郎
◦青年協会（ママ）員ニ訴フ　荷舟女史
◦青年協会（ママ）ニ対スル希望ト要求　赤坂香洋

編輯机案
◦美

第十六号　明治廿一年十一月十五日

論説
◦人類ノ旅行　Ｔ．Ｃ．生
◦誰カ中原ニ鹿ヲ射ルモノゾ　宇野直一郎
◦第一高等中学校の徳育策　吟味生

雑録
◦希望ハ朋友ナリヌ怨敵ナリ・富人と貧者・少年ノ生涯ハ過去ノ生涯ナリ・詩人ノ業務・禿筆録（第一少年の涙、第二行路難々々々）・真美人を評す・情・少年子ト青年思海

寄書
◦思海記者に寄す　龍潭漁夫
◦熊本Ｄ．Ｓ．君の質疑に答ふ　池塘居士
◦人情に通達せざる可らず　高逸生
◦美妙の本原　佐藤左熊
◦地方少壮政事家に一言す　鼎和生
◦青年協会（ママ）委員に寄す　咄表子

編輯机案
◦青年協会（ママ）の特性
◦同志社大学創立の資本募集を聞き青年協会（ママ）員に告ぐ
本会記事
◦数件

第十七号　明治廿一年十二月十五日

論説

◦青年修学の事　枝元長辰
◦近世哲学史　池塘居士
◦英雄論　独尊逸士
◦明治青年の覚悟　釗々生

雑録

◦自由・時間ハ事物中ノ尤モ不思議ナルモノナリ・教育ノ力・大人・太陽ハ地平線下ニアリテ山巓ヲ照ス・仏京巴里新聞概評（高橋五郎訳）・禿筆録（三）小学校員（四）少年男女の勝利（五）一家ノ賢母一国の偉婦人（雁陸居士）・真美人を読む（漣山人）

寄書

◦裏面的の事業（其二）　宮坂徳次郎
◦著述家諸氏に望む　香雨樓主人巌
◦法学の必要を論す　島敬堂
◦池塘居士に懇望す　番町道人

翻訳

◦雑誌流行の利益を論す

編輯机案

◦平民主義の政治を論す
◦明治廿一年の閣筆に際して読者に一言す

附録

◦青年思海第一巻目録・青年協会（ママ）改正規則

第十八号　明治廿二年一月十五日

論説

◦今日の十九世紀は青年の為めの十八世紀なり　植木枝盛
◦青年の元気を論す　桜井幹
◦聖書研究法新案　洛東道人

雑録

◦真正ノ幸福虚偽の幸福・少年ト中年・信仰・智識・仏京巴里新聞紙概評（高橋五郎訳）太平洋記中ノ一節（楽水散史）・禿筆録△非哀△明治の才子△政治家（雁陵居士）・詩数首（高橋聳雲）

寄書

◦宮城県の青年学生　白石鼎和生
◦池塘居士の答案ヲ読ム　D．S．生
◦同志社大学創立寄附金に添ふるの書　清水貞吉

編輯机案

◦青年協会（ママ）の沿革及将来の運動・新年の感

本会記事

◦新入会員登録・会計報告

第十九号　明治廿二年二月十五日

論説

◦汝か運動の世界をは地方の天地に求む可し　日本の学者、青年書生、及ひ基督教徒に　丹森太郎
◦聖書研究法新案　洛東道人

◦保守新論を評す（第一）舶来の国家主義（第二）保守記者の国家教育説（第三）何を以て我国是とせん　I. C. 生

雑録

◦学問ノ作用・貪賤ナル家族・美・友愛・紳士トハ如何・智脳・仏京巴里新聞紙概評（高橋五郎訳）・新の字及大の字・マルテン、ルーテル伝・詩数首・病間随筆・第一（無仏居士）

寄書

◦満天下の青年諸君に望む　天真生

◦青年思海は政論界へ突進せり　百島哲太郎

◦番町道人様へ　池塘居士

編輯机案

◦青年思海の一大進歩

◦編輯員を辞す　上野岩太郎

本会記事

◦在京会員の惣会報告

以上、表紙記載の目録によった。

「青年思海」の創刊は明治二十年八月、八月五日付の会告がある。持主、人見一太郎、編輯、緒方直清、印刷、池本吉治、発行所、東京麻布区箪笥町壱番地、青年協会（ママ）。表紙には、横書の誌名の下に小さく「日本」とありその下に「青年協会（ママ）」と印刷されている。巻頭に「青年思海」と題した一文が「日本青年協会（ママ）」の名で寄せられている。論説欄には、竹越与三郎、池本吉治、徳富健次郎が寄稿。賛成員、会員の名簿がある。賛成員として、伊勢時雄、伊治地季縄、徳富一敬、徳富猪一郎、竹越与三郎、中江篤介、上田充、植木枝盛、尾崎行雄、小崎弘道、海老名弾正、枝元長真、安芸清香、新井毫、湯浅次郎、島田三郎の名がある。会員は八十余名である。「其姓名ヲ詳ニセルモノ数十名アリ次号に譲テ記載スベシ」とあるところから約百名ぐらいが会員であったと考えられる。会員は東京が二十五名、熊本が四十二名と多く、群馬が十一名、その他高知、西京、崎（ママ）玉、鹿児島である。熊本が多いのは徳富との関わりがあったがためであろう。執筆者等から明らかに民友社系の雑誌である。

左記に会則をあげておく。

青年協会（ママ）々則

第一条会名　本会ヲ名ケテ青年協会（ママ）トナス〇第二条位置　東京麻布区箪笥町壱番地ヲ本会事務所トス〇第三条主旨　本会ハ重ニ学理ヲ考究シ文章を練磨スルヲ以テ目的トシ雑誌ヲ発刊シ其機関トス〇第四条会員　会員ハ本〇（ママ）（会）の目的ヲ與ニスル者ヲ以テ組織ス　但シ新タニ会員タラント欲スル者ハ事務所ニ通知シ役員ノ許可ヲ得ベシ〇五条賛成員　本会ノ目的ヲ賛成シ凡テ直接間接ノ補助ヲ為ス者ヲ賛成員トス〇六条雑誌　第一項　本会発刊ノ雑誌ヲ青年思海ト称ス　第二項　発行所ハ本会事務所トス　第三項　欄内ヲ分テ論説雑録翻訳寄書記事トス　第五項　枚数ハ三十頁ヲ越エサル者トス〇第七条役員　役員ハ持主編輯印刷及委員ヲ以テ成ル者ニシテ在東京社員ノ投票ヲ以テ撰抜ス　但シ任期ハ一ヶ年ト定ム　第一項　持主ハ雑誌ニ関シタル万

般ノ整理ヲ司リ併テ会計事務ヲ担任ス　第二項　編輯ハ会員送附ノ原稿ヲ取捨スル等凡テ編輯ニ関シタル事務ヲ司ル　第三項　印刷ハ体裁ノ整理校正等ヲ司ル　第四項　委員ハ其数六名ニシテ本会全体ノ意見ヲ代表シ以上役員ノ相談ニ預リ兼テ会計編輯印刷ノ補助ヲナス者トス　第五項　右諸役員ハ雑誌ノ外兼テ本会全体ノ事務ヲ掌理スル者トス〇第八条会員の職務　会員タル者ハ左ノ職務ヲ有スル者トス　第一項　会員ハ文稿ヲ送致シ各自其地方ノ通信ヲ担当スルモノトス　但シ本会ノ事ニ関シ意見アル者ハ其旨ヲ事務所ニ通知シ役員ヨリ処分ヲ遂リ可シ　第二項　雑誌ノ維持ニ関シテハ会員皆其責ヲ負フ者トス　第三項　雑誌ニ関スル事務ハ一切在東京会員之ヲ担当ス可シ　但シ非常ノ事故ハ総会員ノ議ニ附スルコトアルヘシ　第四項　各地方ニ一人ノ通信者ヲ設ケ会員各自ノ通信ノ外ニ各地一体ノ通信ヲ司フシム〇第九条会費　第一項　会員ハ会費トシテ各自一ヶ月金五銭ヲ支出ス可シ　第二項　会費ハ前月十日迄に必ス送附ス可シ　第三項　各地会費送附ノ方法ハ其便宜ニ任ズ以上

会則の委員六名の名はみられない。創刊号は百部ぐらい発行したらしい。二号に残部のない記事がある。

二号は九月五日発行。約二百名が入会した。

九月十日、事務所を赤坂区台町六十番地に移転する。

三号は十月五日発行。持主が人見一太郎から池本吉治にかわる。池本は印刷人兼任する。事務所は赤坂区榎坂町五番地民友社に移す。約百五十名が入会した。

四号は十一月十五日発行。この月から十五日発行となる。新入会員、約百名。賛成員として志賀重昂の名がある。

五号は十二月十五日発行。新入会員、約七十名余。

六号は明治二十一年一月十五日発行。持主が消え発行人となる。新入会員七十余名。会員が八百十八名になったとある。賛成員として浮田和民の名がある。半ヶ年で会員は八倍にもなり、会員の住所も全国に広がっていった。この月に鳥居龍蔵が入会しているのも興味がある。

七号は二月十五日発行。事務所の所在地の「民友社」が消える。新入会員、六十余名。この月、国木田独歩が入会している。

八号は三月十五日発行。新入会員、約六十名。

九号は未見。

十号は五月十五日発行。新入会員、約八十名。

十一号は六月十五日発行。新入会員、六十名。

十二号は七月二十日発行。編輯人、緒方直清が病気のため八木廉が編輯人となる。そのため発行が五日遅れた。麹町区富士見町一丁目三十四番地に移転。新入会員、約六十名。

十三号は八月十五日発行。編輯人が上野岩太郎とかわる。緒方直清がこの月死去した。新入会員、二十余名。

十四号は九月十五日発行。麹町区一番町三十二番地に移転。新入会員三十余名。

十五号は十月十五日発行。新入会員、五十余名。

十六号は十一月十五日発行。十一月三日、委員の改選期で在

東京会員の総会を赤坂区榎坂五番地幼稚園で開いた。会則の一部改正し、委員として池清輝、池本吉治、上野岩太郎、人見一太郎、山川瑞三を選んだ。京橋区滝山町八番地に移転。新入会員、七十余名。

十七号は十二月十五日発行。この号に創刊号からの目録が掲載された。新入会員、九十名余。巌本善治が賛成員となる。

自見本至第十七号　第一巻目録
（自明治廿年七月至明治廿一年十二月）

論説

新人民発兌ノ主旨　上野岩太郎（見、一）
青年ノ時代来レリ　緒方直清（見、六）
日本ノ新奇ナル大学校　松枝弥一郎（見、一二）
青年は己に緑光を望めり　竹越与三郎（一、一）
精神的及物質的教育　池本吉治（一、五）
漫ニ悲歌ヲ唱フル勿レ　徳富健次郎（一、一〇）
社会二元素の調和　人見一太郎（二、一）
代議政体ヲ論ス　山川瑞三（二、八）
偽老成家　尾崎行雄（三、一）
年歯ト履歴　金峯外史（三、二）
教育家ト耶蘇教　高逸生（三、一〇）
社会ノ相場ト英雄ノ價値　内山義質（四、一）
東西洋英雄の漫評　N．O．（四、五）
政治ノ社会ニ及ホス感化力　梶原龍淵（四、八）
政体国体ノ区別　俣野時中（五、一）
芽屋ノ民ノ為ニ何ヲ盡ス可キ乎　柏本義円（五、四）
流行ノ弊害ヲ論シテ青年処世ノ道ヲ講ス　蟄龍生（五、一四）
青年諸氏ニ望ム　伊勢時雄（六、一）
西郷隆盛論　上野岩太郎（六、三）
人生二個ノ鍛練法　蟄龍生（六、七）
小年処世之話（ママ）　志賀重昂（七、一）
恐る可きは空想世界なり　行雲居士（七、二）
文明ノ発達ヲ論ス　奈須義質
（第一回）文明序論（七、八）
（第二回）文明ノ発達及変遷（八、九）
（第三回）三大事実消長（九、一六）
（第四回）基督教会及文明（十、十）
政治家と与論との関係　山川瑞三（七、十）
新事業ノ得失（毛利次宗）（八、一）
日本文明の独立　上野岩太郎
（第一）文明の藩属国（八、五）
（第二）西洋文明と支那文明（十一、六）
（第三）天然の理法を如何せん（十二、三）
（第四）一個人的の気風を養生せよ（十三、一）
（第五回）独立文明の時機（十四、一）
境遇ト位地　渡瀬巍五郎（八、一三）
芙氏自訓　無名氏（九、一）
数学の効用及其趣味　山川瑞三（九、八）

イリオット氏ヲ論ス　松枝弥一郎（九、十二）
雑録
雑録の要旨（見、二一）
米国通信（一、一三）
詩数首（一、一五）
古今我国ノ文学ニ異同アル所以（二、一四）
詩数首（二、一七）
文体の変動に就て注意す可き者　狷逸遊士（三、一五）
詩二首　狷逸遊士（四、一三）
読書余課　狷逸遊士
（第一）理学の進歩と詞想の関係（四、一三）
（第二）天狗窟（五、一八）
（第三）著者の名題（五、一八）
（第四）時文の短処（六、一二）
（第五）文学界の精気（八、一六）
（第六）日本の陳龍川（八、一七）
詩三首（五、一九）
談話の快楽　鉄山（六、一三）
詩一首　雁陵（六、一四）
日本の阿房宮　鉄山（七、一四）
詩二首　緒狷（七、一四）
詩三首（八、一九）
日清文明論序　松島剛（九、一九）
日清文明論批判　燐濤生（九、二二）
譬へ草　池辺蓮下樓主人（九、二三）
翻訳
人生の旅行（見、二一）
コブデン氏ニ答フルノ書　檜前保人訳（二、一六）
世界四個ノ文明　檜池学人訳
其一（二、一七）
其二（三、二二）
米国政治ノ実状　青楊堂主人訳（三、二六）
人ハ勤労的ノ動物ナリ　青楊堂主人訳（四、一四）
精神ノ訓練　青楊堂主人訳（四、一五）
革命争乱　青楊堂主人訳（五、一九）
与論の勢力　龍淵学人記（七、一五）
ラッハエット氏ヲ論ズ　檜池学人訳（八、一九）
寄書
吾人ノ責任　菊井真之（見、二六）
慷慨非憤ノ世ハ過去レリ　中尾鹿次郎（一、二〇）
社会進歩ノ二変動　宮坂徳次郎（一、二三）
世上ノ優待ト青年の価値　I U（二、二一）
維新前日本政治の変遷及平民主義ノ発達　渡瀬巍五郎（二、二一）
精神的ノ教育ヲ論シテ同感ノ兄姉ニ訴フ　高橋聳雲（二、二三）
青年ノ品格ヲ高尚ニスルノ一手段　I. U.（三、一六）
英雄信者に望む　I. H.（三、二七）

商業ノ興廃及商業ノ価値　小田又三（三、一八）
近時の二大著者　神田会員（三、二〇）
祝辞　島田猪之介（三、二一）
吾人ノ覚悟　奥沢福三郎（四、一六）
今日ノ宗教家　M. Y.（四、一九）
世ノ光トナラサル可ラス　上塚真熊（四、二三）
国の強弱　大竹勝衛（四、二七）
書籍ノ教養者ニ注意ス可キ事　松枝弥一郎（五、二一）
此ノ生ハ人ノ光ナリ　大迫真之
　其一（五、二六）
　其二（六、一七）
青年ハ将来ノ継続者タル乎　深水未（五、三一）
青年思海の新航路　N. O.（六、一四）
霊魂ノ船　梶原龍淵（六、二一）
青年の指導者及奨励家　渡瀬小狂生（六、二四）
敢テ大方ノ女流ニ告ク　I. U.（六、二八）
大都ハ年少書生修学ノ良地ニ非ラス　原勝一郎（六、二九）
善悪の根元及標準　池清輝（七、一六）
消光ノ節制策　M. O.（七、一九）
社会二元素ノ並進　原田黙吉（七、二二）
商海ノ新潮　小田生（七、二五）
我国人ノ不長所　T. M.（七、二八）
青年思海ノ評　燐濤生（七、二二）
想像世界ノ快楽　蝴蝶生（八、二三）
人間の性情　川上信之（八、二五）
群書ニ渉レ　国木田（八、二八）
半開社会ノ理想界　大迫真之　（九、二四）
青年ト其家族　上塚真熊（九、二七）

連載を除き十号以下は架蔵の目録を前記したのですべて省略した。氏名の下の（見）は「新人民」として発行した見本のことで句点の上の数字は号数、下は頁数である。三号には附録があったようだが未見である。

十八号は明治二十二年一月十五日発行。新入会員、三十余名。十九号は二月二十五日発行。新入会員、百四十名。会員総数、千六百六十六名。「青年思海」はこの号を以て幕を閉じる。その理由は政治雑誌と変更するためであった。明治二十二年一月三十日、在京会員相談会を赤坂榎坂町五番地幼稚園で開催して決定した。「従来の青年思海は学術一方の雑誌なるを以て、今般其範囲を拡張して政治雑誌となし、益々智識交換の効用を顕はさしめざる可らさる事。政治雑誌と変更するに付ては、青年協会（ママ）は政社にあらざるを以て、法律上不都合の廉あるに付き、雑誌は協会（ママ）と分離して、別に其責任者を定めさる可らさる事」等々、各人が討議して「発起人一同より相談に及ひ候事を認可し、今後青年思海の事業は、一切発起人にて組織したる自成社に譲与して、其事務を取扱はしむ」と政治雑誌とすることとなった。

以上外的な紹介におわったが、この期に千六百名を有する民友社系の雑誌があったことを埋没させることはできないであろう。

（ほんだ・ひろし　総合科学部教授）